2026/8/30

リトルハウス通信

先月のリトルハウス通信では、支援者がクライエントに対して「声掛け」する際に生ずる内面の「ゆらぎ」について、『「ゆらぐ」ことのできる力　ゆらぎと社会福祉実践』（尾崎：1999）という書籍を参考にしながら考えてみました。そして本号もこの書籍を参考にしながら、もう一歩「声掛け」と「ゆらぎ」いうものの実態に迫ってみたいと思います。

本書において尾崎は、支援者が感じる「ゆらぎ」について『「決めつけ」や「押しつけ」とは対極の性質を持つ』ものとし、『そこに新たな発見や創造性、変化や成長を導く可能性がある』ものと述べています。さらにその効能について『われわれの思考を多様なものに育てる可能性をもつ」とも言及し、『その思考の多様性はしなやかで柔軟な関りを育み、援助における発見や創意工夫を醸成する』と考察していました。

例えばですが、支援者が「ゆらぎ」をまったく感じずに、声掛けを促進していったらどのようなことが起こるでしょうか。その声掛けには迷いがなく、竹を割ったようなテキパキさがあり、堂々とした強いリーダーシップと共に『有無を言わせない自信に満ちた力』がその言葉には宿っているかもしれません。とても頼もしい言葉に聞こえるでしょう。だからこそ『有無を言わせない自信に満ちた力』を発信する際には、「ゆらぎ」の感性は非常に邪魔なものになります。なぜならば「ゆらぎ」は常に葛藤や迷いと共にあるからです。

では、いっぽうで支援者が「ゆらぎ」を感じながら声掛けをする場合はどうでしょう。いちいち心に躊躇が生まれ、立ち止まり、自分の言葉や思考を疑い、相手への伝わり方を気にする等、発言に対してマイナス要素が常に付きまとうことになります。即ち「自信がまったく満ちていない言葉」です。それは尾崎が示している『人の生活の仕方や生き方につねに正しい画一的な答えが存在しない』故に、心に「ゆらぎ」が発生するという考えと一致します。即ち「支援者の自信のなさ」と「ゆらぎ」はイコールで結べるものと私は考えます。

世間的に「自信がない」という状態は、自分自身の能力や価値に対しての評価が低く、自分を信じられない気持ちを指していて、決して積極的に誉められる言葉ではありません。しかし支援の現場では、もしかしたら支援者の「自信のなさ」にこそ、クライエントが自己決定をする際の力添えになるのではと私は感じています。それは支援者に明確な自信がないからこそ、クライエントと目の前の課題を「共に考える」という構造が自然発生的に生まれると考えられるからです。それが即ち、尾崎のいう『(ゆらぎには）しなやかで柔軟な関りを育み、援助における発見や創意工夫を醸成する』という言葉につながるのだと思います。我々支援者は、自分の声掛けに心がゆらぎ「自信が持てない状態」になることに対し、「自信が持てる」よう研鑽を積んでいくことが大切だと、本書を読んで考えた次第です（鈴木)。

■参考文献

尾崎新（1999)『「ゆらぐ」ことのできる力　ゆらぎと社会福祉実践』誠信書房